

第六節 震災からの復興と各種劇団の復活

演劇復活の概況 帝国劇場の復活 舞台への復帰 中村翫右衛門 大野外劇 沢田正二郎 〳

久米正雄『安政小唄』 〳復興公演 水谷八重子 〳再興芸術座『真間手児奈』 〳森律子

演技への努力 〳岡田嘉子新劇から映画へ 〳さらなる自立 伊沢蘭奢 〳震災後の劇壇 秋田雨雀

大地震発生 の三ヵ月後に刊行された『時事新報』の付録『大正大震災記』には、震災の詳細とともに政府における帝都復興院の発足と復興計画の概要が記録される。これに続いて同誌では歌舞伎、新劇、音曲など芸能界の被災と復活についても数頁にわたり報道された。

「復活の光に恵まれた芸界」(時事新報『大正大震災記』)

文化の精粹を誇った帝国劇場の絢爛目を愕かす壮麗な建築も、また海鼠壁に櫓の昔を偲ぶ純歌舞伎式の新富座の構造も、みな一瞬の間に灰燼に帰して、ここに帝都の劇場並びに各種の演芸界は無惨にも全滅の運命に陥ってしまった。

時あたかも初秋の劇団を飾る各座の九月狂言は既に準備整うて、さきがけをなす帝劇は、吉例によって一日がその初日であった。幸四郎松助補導の外に寿美蔵亀蔵も参加しての女優劇狂言は『阿漕』と金子洋文作『投棄てられた指輪』と太郎冠者作『賢き馬鹿』で開け、新富座は左団次一派に中車のはか宗十郎加入の顔合わせ、狂言は岡本綺堂作『鬼坊主清吉』と『鎌倉三代記』と松居松葉作『政子と頼朝』と大森痴雪作『里見伊助』で開演と極り、市村座は菊五郎、友右衛門、男女蔵、栄三郎、彦三郎の座付一座、狂言は黙阿弥作『鳴ちどり月の白浪』と長尾豊作『物草太郎』と『伊勢音頭』、また明治座は伊井一派の新通俗劇で開場、狂言は清見陸郎作『宮古路豊後様』と『仇し仇浪』と伯山口述瀬戸栄一脚色『夕立勘五郎』と据り、本郷座は河合と猿之助の合同劇に源之助が加わり、『敵討以上』と『秋の夜』と『驚』と『今戸心中』とがそれぞれ上演されることになっていた。

このほか浅草公園六区を中心としてそこにある御国座、観音劇場や常盤座、金竜館、十二階劇場帝京座(公演劇場は沢正一座の賭博事件で休場中)、宮戸座、御園座などの各劇場を始め、三友館、富士館、帝国館、松竹館、日本館、電機館、満盛館、キネマ倶楽部等の各活動写真館ならびに花屋敷、昆虫館、江川玉乗り等の各興行物に至るまで、朔日という物日を書入れて、いづこも平日よりは開場準備を早め、出盛る人を待っていた際の震災とて、場所柄大騒ぎを演じた・・・

こうして、以前の火災のため復活工事半ばであった歌舞伎座を始め、新富、明治、本郷の五大劇場を持ち松竹の損害額総高は実に一千万円に及び、帝劇は有楽座を加えて時価の惨害額六百万円、また市村座は百万円、浅草常盤座、公園劇場等をもつ常盤興行部は百万円の損害ということである。

そして帝劇はすでに復活工事に着手し、来春四月頃までには竣成の予定であり、歌舞伎座もその頃に落成

の見込みで、新富座、明治、本郷各座は少し後れて五、六月頃仮設工事を終り、市村座も四月頃竣工の上、菊五郎一座の本興行は六月に花々しく開演する予定である。

代々木にある歌右衛門吉右衛門の邸宅は火災を免れたが、梅幸は住居を焼かれて蔵が助かり、その他左団次、幸四郎、宗十郎、友右衛門、松助、猿之助、八百蔵、亀蔵、鶴蔵、左升、新十郎、芝鶴、長十郎、権十郎、三升、新之助、羽左衛門、仁左衛門および水野好美、石川新水、福嶋清、花柳章太郎、藤井六輔、小森誠等は皆焼け出されて、着のみのままといい惨めな姿になったのが少なくない。・・・

かくてそれらの舞台を失った東京の俳優は、生活のために、いきおい他に稼ぎ所を求めねばならなくなってきた。そこで仕打側からも発案して、まず大阪で興行を目論んだが、感情やいろいろの事情で一寸行き悩んだが、過半は十一月頃から繰出し、歌右衛門、羽左衛門、梅幸、菊五郎等はいずれも年内一杯はどこへも出稼ぎせず、休むこととなった。

地方興行の先発隊としては、勘弥一派に浪子、房子が加わって新潟方面へ出かけたのが筆始めである。それから震災後東京での一番槍は、十月十七日を初日に五日間牛込会館で、花柳、藤村、小堀、石川等の新派の新進連は旗揚げした復興劇で、『大尉の娘』と『ドモヌの死』と『夕顔の巻』とが上り、罹災民慰安の野外劇には同じ十七日から三日間日比谷音楽堂で試みた沢正一派の『地藏経由来』と『勧進帳』と『高田の馬場』の公演で、それらが東京の劇団に兎にも角にも復興の烽火を揚げた第一声である。①

① 『大正大震災記』（『時事新報』第一四五〇四号付録）六二一六三頁。

帝国劇場による被災後最初の興行は十一月九日から三日間、帝国ホテルの演芸場を借りたヤツシャ・ハイフェッツのヴァイオリン演奏会であった。イシダ・アクロンのピアノ伴奏で人々を慰めたのは、シェーベルトの「アベマリア」やヴィニヤースキーの「ヴァイオリン協奏曲」とされる。同じ仮舞台で同月松旭斎天勝の一座の奇術、翌月には舞台協会により山本有三の戯曲『生命の冠』などが演じられた。①

震災後の帝劇興行（『帝劇の五十年』）

九月一日の大震災当時、ハイフェッツはバンクーバーにあって、既に日本へ渡る船の船室も約定済みであり、出帆の日も目前に迫っていたので、やむなく彼は予定通りの極東旅行に出発して、まず上海に直行し、同地から帝劇と連絡をとって、演奏会の日取りを十一月九日から三日間と変更した。劇場も帝劇が焼けてしまったので、帝国ホテルのささやかな演芸場で行なうことを承諾してくれたという。・・・

焦土と化した災害都市のどまん中で、この世界一流の提琴家のリサイタルは、最高十円の入場料で開かれたが、その前売成績が全く意外というほどの盛況だったので、ハイフェッツ氏も気をよくして、自分も東京市民のために義捐演奏会を開きたいと申し出た。ハイフェッツ、ストローク氏、山本専務の三者主催による義捐演奏会が入場料一円均一で日比谷音楽堂に催されたのは、十一月十二日。もちろんこの日も大入満員で、

① 『帝劇の五十年』東宝株式会社、一九六六年。一一八一―一九、一八二―一八三頁。

主催者は純益金三千円を当時の震災救護事業に寄付することが出来た。・・・

麻布の南座でも随時東京公演を行うこととし、・・・十三年二月昼夜二部制、しかも月中より狂言を変えて二の替りを出しているが、勘弥に森律子、村田嘉子らの女優陣、それに佐々木積という顔ぶれで、歌舞伎では『一条大蔵譚』『妹背山の道行』『新皿屋敷』、書き物では松葉作の『秀吉と淀君』武者小路作の『桃源にて』それに太郎冠者の『クレプトメーニア』と『執心の鬼』などが上演されていた。が、つまるところ災害都市の多くに受けたのは、たっぷり笑いあり涙ありの太郎冠者の二作品だったという。・・・

改築成った〈大正帝劇〉は十三年十月二五日に幸田露伴加筆、平山晋吉作『神風』を第一の狂言として幕をあけている。出演俳優は梅幸、幸四郎、宗十郎、勘弥、松助などに再来の梅蘭芳。梅蘭芳は『神風』その他の歌舞伎芝居の終ったあとで、相変わらず大受けであった。二五日から翌十一月四日までの短期公演でこれは終わっているが、連日開幕前に主なる専属男女優が舞台に並んで、帝劇再開場の御挨拶を観客に述べた。・・・開場の年でかなりの話題になったのは、十一月の第二回の歌舞伎興行に『二人道成寺』が出、福助（五世）の白拍子花子、栄三郎の同じく桜子という配役で、当時の好敵手だった若女形同士の張り合った競演が、東都の福助ファン、栄三郎ファンを大いにキャアキャアいわせたことであろう。・・・

大正十三年四月帝劇が復興中だったので、宗之助はかわれて四谷・大国座に出演、『壺坂』のお里その他に妙技を見せていたが、七日目の舞台で動脈硬化症のため突如として倒れ、お里役の扮装のまま三六の若さ

であの世に去った。帝劇が受けた最初の技芸面の損失だったといっている。①

市村座の有望な若手であった沢村宗之助は、新劇勃興にも熱意を抱き、自由劇場第一回公演では左団次の相手役に抜擢された。明治四四年歌舞伎座からの尾上梅幸に呼応して、彼は明治座から帝国劇場へ移籍したのである。復興公演大国座における宗之助の急死は、同家の家庭教師であった沢村貞子の自叙伝でも回想される。宗之助の次男雄之助、のちの個性的な映画俳優伊藤雄之助が、このとき五歳の初舞台であって、父親の悲運な最期に居合せていた。

名優の悲劇的な死（沢村貞子著『貝のうた』）

帝劇の大幹部、初代沢村宗之助さんのところから、こどもたちの家庭教師にきてほしいという話があったのは、ちょうどそのころだった。宗之助さんは頭のいい近代的な俳優で、立役、女形ともにこなし、「これからの役者は学問をしなければならぬ。新しい風を入れなければ、やがて、歌舞伎はほろびていくだろう」というのが持論だったという。・・・一週二回、長女文恵、長男恵之助、次男雄之助、三男敏之助さんたち四人の予習復習のために、私は学校の帰りに上野桜木町の沢村家へ寄った。月謝は四人で二十円、夕食のほかに交通費五円を支給された。いちばん勉強熱心だったのは次男雄之助さんだった。どんなことでも納得の

いくまで質問した。・・・

私が沢村家へ通いはじめて何ヵ月かたったある日、宗之助さんは突然、四谷の大国座の舞台で倒れた。『壺坂靈驗記』のお里に扮して、幕切れ近く谷底へとびこんだまま、二度と立ち上がれなかったという。死因は高血圧だった。

まだ若いこの名優の悲劇的な死は、すべての歌舞伎関係者とその愛好者たちから痛惜された。役者というものは、その死とともにすべてが失われる。書いた本も描いた絵も残らない。そのからだ一つが資本であり、会社も工場もその肉体のなかにあるのだから、子孫にゆずりわたす何ものもない。未亡人とそのこどもたちが、今後の歌舞伎界で生きる道はけわしく、きびしいに違いない。葬儀ははなやかだった。飾りきれないほごのたくさんの花輪、莊重な読経、参列する有名な歌舞伎役者を一目みようとむらがる町の人たちを眺めながら、私は役者の一生というものをぼんやり考えていた。

美しく賢い未亡人は、亡夫の遺志をついで、こどもたちを教育したいということで、私はその後も、私の学生生活の終わるまで、この家族の引越す先きざきへ家庭教師として通った。毎週二回、ほとんど休まなかった。①

歌舞伎座は二年前の火災で壊滅し、再建半ばで大地震に襲われた。「(大正)十年十月三十日の朝」と梨園の

① 沢村貞子著『貝のうた』五六―五八頁。

長老、第七代市川中車は誌す。「突然電気室の天井から漏電発火して、さしも日本一を誇った檜舞台の大劇場が、なんとわずかに四十分の間に灰になってしまった」。松竹ではただちに再建を構想して一年以内の落成を期し、中車らは関西の劇場へも出勤する。「悪い時には悪いことが重なるもので、」「あの大震災のために、すでにその半ば以上も出来上が」り、「場内に積み込まれてあった榎材の全部を焼き尽くし、竜骨の梁は飴のように曲がってしまつて、大損害を蒙った」① こうした歌舞伎座の様相が、河原崎長十郎の書簡によって、ドイツ留学中の土方与志に伝えられたことは、前述のとおりである。

のちに長十郎と前衛的な劇団「前進座」を結成する中村翫右衛門は、自宅で昼食に大地震に襲われた。人形町、日比谷、日暮里、さらに那須へと脱出する被災記録は詳細であるが、ここでは演劇の復活に努める部分を参照する。

震災の苦悶と演劇の復活(『人生の半分―中村翫右衛門自伝』)

劇場はほとんど焼けて、麻布の末広座が残っているだけと知れた。麻布で中車氏・片市氏が始めて芝居をやったのは、十月はじめか、九月末かはつきりしないが、なんでも市民は熱狂して迎えて、大満員だった。これまで、もうこの焼野が原では芝居など見るものはないし、劇場はないし、不景気は襲うだろうし、地方

① 市川中車著『中車芸談』(『日本人の自伝二〇―市川中車・中村鴈治郎・市川左団次』平凡社、一八九一年。

でもそれぞれこの負担を背負うから、当分見込みはないと、気の早いものは廃業したもののさえある。人心が芝居どころでない。こんなときに芝居なぞやったらなぐられる。こう一般に考えられていた。こう一般に考えられていた。もちろん私もそう思った。ところが事態は反対だった。

動揺し、混乱し、不安定な人心にとって、心の糧は絶対に必要なだった。もう芝居なぞ見られないだろう、この有様で、どうして復興し、どうして生活していけるか。こういう暗い人心に、焼野が原でも芝居はやれる、見られる、ということは、今後の生活のゆくてに大きな確信を与えることだった。

もう一つはすすんでくる人心をやわらげ、人間生活の楽しさを回想し、人に対する愛情を取戻す力となった。食糧を得ることが第一だが、それといっしょに心の食糧も困難なときほど求めているものだとはじめて知った。この場合には映画とちがって、機械の必要もなく、人間が出ていってすぐ演じることのできる演劇は、大きな力を発揮した。野天でもやれることも知った・・・

十月になって帝国ホテルの舞台で慰安会を催すことになり、歌右衛門はいきつをし、出し物は板東三津五郎・福助師の舞踊、二人狸々と決まり、私は酒売りの役を演じることになった。衣装、かつらはつけずに、黒の紋付き、袴でつまり袴躍りの形式でやることになり、私は躍りの振りを三津五郎氏や三津之丞氏にならった。私としては破格の大役なのだ。震災後始めて舞台に立った私は、胸のとどろきを感じるのだ、それはよろこびなのだ。

観客は場所柄だけ固定していたが、その雰囲気は温かく、観客自身が焼跡のなかのはじめての舞踊として感激的な気分にはたっているのだった。私は舞台に立って、精神傾けてつとめた。私も焼跡のなかでこんなにも早く舞台に立てたという感激にひたっているのだった。この催しは大成功だった・・・

大正十三年一月は麻布末広座が明治座と改称して大劇場としてスタートをきった。大劇場は全部焼けてしまったのだから、大幹部の出演する劇場がないのだ。浅草の松竹座がそれから後に開場されたのだが、まずこの山の手の明治座に歌右衛門一座が出演することになった・・・

今年は恐ろしい震災の記憶をとり去ろうと、人々は復興、復興！という声で名実ともに塗りつぶそうと努力した。復興事業は急がれ、焼跡にバラックが建てはじまり、内部に抱いている社会矛盾が解決されないまま、その上を人々は生活をたてるために血眼になってかけまわっていた。この自分すいといん屋のバラック店が多くできた。終戦後中華そばが多くできたようなものだ。

劇場建設はとくにスピードで行われた。一月末には四谷の大国座が開場された。帝劇の人々が出演した。宗十郎・宗之助・勘弥というメンバーだった。三月には観音劇場と本郷本郷座、赤坂演技座、五月には浅草常盤座、下谷市村座、七月には本所寿座、人形町には日本劇場初開場、丸の内の邦楽座、十月には丸の内帝国帝国劇場、すさまじい勢いで劇場が復興した。これは人心安定の政策と、国民が復興に従い慰安を求める現れだと見られる。

三月、四月は同じ麻布明治座で猿之助一座と帝劇の女優連との合同劇の公演だったと思う。私も参加した。桐一葉、初瀬浪子の淀君、森律子のかげろう、猿之助の銀之丞、村田嘉久子の乳母、私は茶道珍伯・・・また、浅草松竹座へ歌右衛門・吉右衛門一座で出演した。歌右衛門の浅草進出はこれが初めの終りだった。

岡本綺堂作勾当侍だでて、私は足利方の源内とかいう敵役をつとめた。①

激震のあと公園劇場へ辛うじて戻った新国劇団員は、避難した上野でも危険が迫り、警視庁での再度拘留は免除されながら、震災第一夜は本郷の路上で、第二夜は小石川の広馬場で仮寝する。数日間転々とするなかで、食物を提供したり、日用品を届けてくれる知己や友人もあった。

被災者があるいは哀悼し、あるいは慰藉しながら、まもなく彼らは復興への民心を激励すべく、野外劇実施の準備に着手する。「日本演劇史上燦然と輝く、」と、新国劇の歴史に刻まれる。「日比谷公園音楽堂に於ける大野外劇は、絶好の秋晴れのもとに正午の号砲を合図にその幕を開けたのであった。日比谷公園へは早朝から人が詰めかけ、開演数時間前から数万の観衆を迎えて、たちまち満員となってしまった。」意外にも「歌舞伎の立唄、立三味線、鳴物として聞こえた長唄界一流の人々が、大勢参加を申入れ」「その数は無慮百余名に達したので、一日では到底並びきらず、三日間にわかれて出演し」た。②

復興公演決行の壮図（沢田正二郎著『苦闘の跡』）

六日目にまた私たちは、焼けずに残った一高前の依藤君の家へ引きかえしていった。秋の朗らかな日が続

① 中村翫右衛門著『人生の半分―中村翫右衛門自伝』筑摩書房、一九五九年。下巻、八九―九〇、九八頁。

② 新国劇編『新国劇五十年』六五―六六頁。

いて、帝都の焼跡には早くも復興気分が漲って来た。人はバラックを建てて、自己の職業にいそむべく急ぎだした。・・・ある人はここにバラックを建てて住むようにと私に勧めた。けれども私は考えねばならなかった。―自分はいま、住むべき家のことを考えるときではない。不自由ながら友の家さきやかな二階の一室に雨風を凌いでいる。食うものも腹をへらさない程度には食っている。―私には私のバラックを建てる前に、まず自分の天職について考えなければならぬ義務があった。・・・

私は依藤君と僅かな花束を携えて、焦土の巷を終日歩き続けた。人が面を掩うて去る屍の山に、黄色い煙に煤けた痛ましい屍の山に跪いて、いつまでもいつまでも礼拝した。この人々の断末魔の苦しみを自分の身にひしと味わって、この人々がこの世に残した思い事の幾分でも果たそうと誓い祈るのだった。この日々の勤めは、私たちのこれからの演劇の生命に、どんな大きな覚悟を与えただろう。そんなら私たちはこの難に際してまず最初に何を為すべきであるか。

世の中の生業の中に、演劇ほど社会生活、人間生存の上に密接なる関係をもっているものはないであろう。私はこの演劇を鑑賞する人々の豊かな心持に抱かれて、今日まで生長して来たのである。今も私には安住の前に奉仕がなければならぬ。私たちは一日も早くこの荒れに荒れたる帝都に、演劇の楽園を築かねばならぬことを知ったのだ。あらゆる支障を排し、あらゆる困難をくぐり、私の怨みも仇も打ち忘れて、朗らかな秋の日に帝都幾万の人々に心の安けさを与うべく、働かなければならぬ義務を感じたのだ。この企てのためにはいかなる苦痛、いかなる恥をも忍ばなければならないと思ひ立った。

こうして富まざる身も心の富に補われ、また疲れた体も心の輝きに励まされて、雨の日も濡れそぼちながら、晴れたる日にはその濡れを乾かしながら、街から街を飛び廻った。私と同じ心をもった人々は、この貴

い企てのために特志を捧げて、あるいは遠くから馳せ参じてくれる人も数多かった。しかして、この涙ぐましいほどの努力は、あらゆる人々の諒解を取得して、在帝都の各新聞社後援、劇作家協会賛助、国民文芸会主催の名のもとに、十月十七、八、九日、三日間の野外劇となって現れた。①

第一久米正雄氏作『地藏経由来』、第二『勸進帳』、第三長田秀雄氏『高田の馬場』の三狂言―空も晴れやかな秋日和、日比谷の原に数万の都民を迎えて、焦土の都に初めて色彩と音楽の花を咲かせ、荒れ尖った灰色の人心に初めてにこやかな芸術の香気を吹き込んだのであった。それは肉体の飢えを慰める義捐の糧と共に、少なからぬ精神的更生力を、難に狂う人々の胸に捧げ得たことと信ずる。

果してその後私は、このささやかな捧げ物のため、悲嘆と恐怖のどん底から再び人生の歓びと新しい努力をとり戻したという感謝の言葉を、八方の人から聞くことを得た。苦難のうちに正義を固握し、正義のうちに神をたたえながら、こうして私どもはいと朗らかな秋の日を浴びて、九州巡業の途についた。勿論着のみのままのすがたで。

旅から帰ったのはその年も暮れ近くであった。は、大震災後の帝都の地は、多く焼け爛れた姿のままで、あだまだ劇界の復興などということは、他の諸事業に比べて等閑視されていた。否、精神文化の復興こそ、一切の復興の力である。私はかく信じて、翌十三年正月、思い出深い公園劇場の焼土の上に、母校早稲田大学から借してもらった大天幕を張って興行の陣を張った。

① 沢田正二郎著『苦闘の跡』一六三―一六五頁。

名づけて天幕劇場！第一私の自作『折伏の日蓮』、第二菊池寛氏作『震災余譚』、第三行友李風氏作『国定忠次』（山形屋）を出して、復興演劇の第一声を挙げ、十五日間連日大入りの盛況を見ることができた。

次いで一行は八王子、甲府を振り出しに、北国を巡り大阪に廻り、再度の帰京とともに、三月中旬帝都復興劇場中の魁、知友初山氏、安藤氏、小泉氏等の尽力によって構えられた赤坂演伎座に根城を固め、第一岡栄一郎氏作『松永弾正』、第二藤井真澄氏作『狂える桜花』、第三長田秀雄氏作『寺田屋騒動』、第四久米正雄氏作『安政小唄』で、こけら落しの興行を催した。①

新国劇による復興公演のひとつ、『安政小唄』は大正十三年雑誌『婦女界』に発表、同年三月ブラック建造の赤坂演伎座で初演され、丸の内に新築された邦楽座でも大正十五年九月に組まれる。② 戯曲の時代設定は七十年前の安政江戸地震と遡るが、鎌倉における彼自身の被災体験を基盤とするはずである。大地震が現状の破壊である反面、新たな未来への門口となりうることを、この作品からは教えられる。

久米正雄作『安政小唄』 新世話物全三幕

① 同書。一一一―一二二頁。

② 田中栄三著『明治大正新劇史資料』一七二、一七四頁。

人物

川崎屋喜兵衛 質屋の主人、後に鳥追いの男

同 お千世 その妻

山口屋源助 別の質屋の主人

柳川清七 お千世の前の婚約者

巽屋のお嘉代 水茶屋の女、のちに鳥追いの女

番頭、小僧、子守、水茶屋の女等多数

時代 安政二年十月二日、および翌年にかけて

場所 江戸、日本橋及び両国近辺

第二幕

両国付近。水茶屋（巽）の奥座敷。庭に面した離室めきたるところ。安政二年十月二日夜、戌の刻頃。川崎屋の主人、喜兵衛、座敷の中央なる食台に凭れり、酒を飲むともなく、ぼんやり物思いに沈み居る。・・・遠き弦歌、拍子木の音など。お嘉代奥の襖を開け、静かに情を含みて入り来る。

お嘉代 まアほんに喜兵衛さん、おめずらしい。今自分どうなされたのでござりまする。

喜兵衛 お、お嘉代どのか。きつう待つて居ましたぞ。

お嘉代 それは大変気の毒でございました。つい他のお客に誘われ、観音さまへお詣りに参っていた故、

折角早うからのお出でを、無駄に過させ申しました。したが、もう貴方さまにはお帰りなさらね

ばならぬ時刻ではないかえ。お店の手前、お内儀への務め。

喜兵衛 いや、それが気になる位なら、わしはもうとうに去んでいる。今日は内へ帰りたうない故、かう

して今頃まで愚図々々していたのじゃ。

お嘉代 それやまたどうして。

喜兵衛 少し深い仔細があつて。ーこれ、お嘉代どの。たまに来て浮かぬ顔の、この身の愚痴ばかり聞かせるようじゃが、このまましばらく相手になって、わしの氣持を紛わしてくりやれ。たまに来て無理を云うようじゃが、そなたとわしとは客と女でなうて、幼な馴染みの友達ゆえ、どうか許して下さらぬかえ。・・・

お嘉代 それでは何かお内儀と、仲違いでもなされたのでござんすかえ？

喜兵衛 いや、仲違いと云う訳ではなけれど、ちと面白い仔細の程を、まア馴染甲斐に聴いて下され。と云うのはな、わしも前から知つての事じゃが、現在わしが女房お千世には、昔言い交した男があつたのじゃ。柳川屋という袋物店の、次男の清七殿と云うての、七年前に志を立て、三年ほどの期限を切つて、お千世と固い約束の下に、長崎へ身を立てに行かれたのじゃが、その後四年経つても五年過ぎても、風の便りさえ無くて、帰る様子も見えぬ故、舅御さまもまたお千世も、もう清七殿はこの世に居ぬものと諦め、そのためわしを婿になされた。ところが七年たった今月今夜、その清七殿がふいに帰つて來られたのじゃ。

お嘉代 まア！左様でござりまするか。して、貴方さまのお内儀は、それにどうなされたのでござりまする。

喜兵衛 丁度わしが外から帰つて、門口へ入ろうとした折、ふと何やら変つた男と、訳ありげなお千世の

声音。質入れ客とも思われぬため、悪い事とは知りながら、つい聞き耳立てて、中の様子を伺ったところ、お千世の心もその男の心も、うすうす洩れて聞こえたのじゃ。・・・淋しいやらまた口惜しいやら、思案に余った心持で、そのまま家へは入りもやらず、歩き暮らした末、ふとまた足の向くままに、そなたの事を思い浮かべて、心のままを打明けたら、相談相手にもなって呉れるかと、ここまでこうして来たのじゃが、ほんにわしのこの身の処置は、どうしたらいいものじやろうのウ。

お嘉代　まア、左様でござりましたか。それにまたお可哀そうな。どうやら顔色も優れぬ様子ゆえ、何でおいでなされたかと、一と目見たときから按じて居りましたが、そう云う仔細でござりましたかえ。・・・

喜兵衛　このまま何も知らぬ顔を、家へ帰って清七殿に合わせ、ただ尋常に挨拶して、お千世の素振りも見て見ぬふり、名ばかり夫の境涯を続けて行けぬこともなけれど、それではわしが惨めなばかりか、お千世があまりに可哀そうじゃ。・・・ほんにのウ。そう思うと何だか浮世が厭になった。こういう時に貴方と私が、幼な馴染みというだけでなうて、もっと深い仲だったなら、心中を云い出さないと限りませぬぞえ。・・・

（二人淋しく笑い、考えに沈む。間。遠い弦歌、拍子木の音など、ようやく冴ゆ。）

（突然「天地自ら声あり。がら、ひし、と、千万の雷鳴り渡るよう」に、屋鳴りひしめき始む。）

喜兵衛　地震^{ない}ぶりじゃ！（色を変えて立ちあがる）

お嘉代　まア大変！（と思わず喜兵衛に縋りつく。）

（二人は一瞬間寄り添って、四辺の様子を眺めている中、震動益々激しくなる。）

喜兵衛　これや大地^{おおい}震じゃ。早う！

（二人もつれるようにして、外へ出ようとする。はか取らぬ足取り。その中に更に激しき震動と共に、柱倒れ軒落ちて、屋根は二人を被うように潰え塞ぐ。）

（天地暗暝。稲妻の如きもの、轟々たる響きと共に空を掠む。）

お嘉代　喜兵衛さま！喜兵衛さま！

（潰えし屋根の横手より、お嘉代這い出すように出で来たり、なおも呼ばう。）

喜兵衛　（の声、屋根の中より）お嘉代どの、おうい。此処じゃ。助けて呉れ。此処じゃ！

（お嘉代狂気の如く、今出で来りし屋根の間より、瓦や板を必死にめくるながら入り込む。しばらくして引きずるように、喜兵衛を連れ出し来る。）

お嘉代　（喘ぎながら）喜兵衛さま。どこもお怪我はござりませぬか。

喜兵衛　（ちよつと跛を引いて片足を撫で）お、この方の足を何やらに挟まれ、いくら焦っても出られなかったを、そなたに思い切って引き出されて、ようやく命拾いを致した。が、そなたもよう無事でいやったのウ。

お嘉代　私や倒れて転んだま、うまく隙間へ隙間へと持って行かれて、思いの外たやすう出られました。さア、一刻も早う逃げませうわいなア。

喜兵衛　そうじゃ。こうしてはいられぬ！わしやこれから、すぐ家へ！（と駆け出そうとする）・・・

お嘉代 えッ！まア待って下さりませ。どこへおいでなさるのでござんす。

喜兵衛 家もどうなったか分からぬ故、少しでも早う行ってみねばならぬ。・・・

お嘉代

そりゃあんまりじゃ、喜兵衛さま！そなたはつい今の先刻、家へ帰りたうないが、帰らでも済む工夫があらばと、云うていたではござんせぬか。この恐ろしい大地震は、そなたと私には天の助け、こうして共に潰されながら、生命冥加に助かったのも、みんな何かの因縁事。こういう稀有の大変事ゆえ、そなたが死んでしまったと思えば、家へ帰らずともよいであろう。二人とも一緒に死んだ体にして、此処から何処ぞへ遠く落ちのび、一緒に暮らそうではござりませぬか。

喜兵衛

うーん。成る程そう云われるば、これこそ思わぬいい機会なれど、大事の際に見棄てるのも、どいやら心に懸ってならぬ。

お嘉代

また何を氣迷い。そんな心配している間に、きつとそなたのお内儀も、清七殿とやらに手を取られて、何処ぞへ難を逃れたか、それとも二人もろともに死なばと、梁に押し潰されたか。ーもし、喜兵衛さま。お前は私と一緒にが不足かえ。

喜兵衛

何の不足どころではないけれど。ー(と、ふと向うを見やり)やア、間近かに上ったあの火の手。これはこうして居られぬ。お嘉代どの、さア、早う一緒に！

お嘉代

そんなら連れて逃げて下さりまするか。

喜兵衛

おい、そうじゃ！何事も天に任せて。ー

(二人手を引いて遁れ去る。まだ聞ゆる阿鼻叫喚。遠く二、三カ所の火の柱。近く迫れる焰の色、だんだん紅く舞台に満つ。)

騷擾の中に、幕。

①

病後の身で震災の惨禍に直面して水谷八重子は、義兄水谷竹紫に導かれ、新派の花柳章太郎や小堀誠とともに神楽坂の復興公演に参加した。沢田正二郎の野外劇とともにこの企画は、演劇復活の先駆と称讃される。これに自信を得て竹紫は島村抱月と松井須磨子に因む再興芸術座の結成に着手し、十九歳の八重子を中心に、青山杉作や友田恭助を団員に迎えた。かくして震災第二年の二月と四月牛込会館で再興芸術座の公演が挙行され、この時期には小山内薫による築地小劇場創設の準備も進みつつあった。

復興公演から第二芸術座へ (水谷八重子著『女優一代』)

やがて焦土の東京が「帝都復興ええぞ、ええぞ」という歌声とともに、ノミの音、槌の音とともに起き上がった十月のはじめ、義兄は牛込会館を本城に(演劇復興)の狼火をあげて私に打ち明けてくれました。私の健康も震災を境にめっきり恢復していたのです。

それから義兄は文字通り東奔西走、十月の十七日から一週間の公演の日取りを決めました。出演は花柳章太郎、小堀誠、石川新水、藤村秀夫さんなど新派の新劇座の方たちが中心になり、その中に私も加えていた

だいたいです。ちょうどそのころ日比谷の音楽堂で沢田正二郎さんの新国劇が、十五日から三日間『勧進帳』のページェント公演を敢行され、はからずも二か所で演劇復興の狼火があがることになりました。

牛込会館は神楽坂の中程にあり、舞台の間口が三間半、興行きが二間くらいのもので、ちょうど寄席をひとまわり大きくした程度の小屋でしたが、なにしろ震災後最初の芝居ということで、横浜や千葉、埼玉あたりから駆けつけて下さったお客さんもあって、大変な盛況でした。

だしものは『大尉の娘』『ドモ又の死』のほか瀬戸栄一さんの『夕顔の巻』の三つ。私は『ドモ又の死』と『夕顔の巻』の難役に出演いたしました。衣装や小道具はなに一つ揃わないので、私や義兄の着物はもちろん、神楽坂の芸者さんからも着物、帯、持ちものまでお借りするという状態でした。楽屋で顔を化粧しながら、ふと窓の外を眺めますと、お客さまが入り口から遙か神楽坂の肴町停留所近くまで延々と行列をつくって、開場を待っておられるのです。開場後も、入場出来なかった方のなかには「横浜から歩いて来たんだからみせてよ」と入り口で嘆願している女性もあり、いまだ芝居とお客さんの結びつきの強さを感じさせられました。

一方この公演の成功で自信を得た義兄は、私を中心に芸術座再興を決意、着々とその準備を進めて行っただけです。しかし、いまにしていますのに、この芝居の成功が今日の私を形づくったのだということです。それは、その後青山先生や友田さん、田村さんが築地小劇場の創立に参加したとき、私も義兄の反対を押し切って、参加できなかったわけではありませんでしたが、この芝居に出ている間に、私の気持に変化が起きてきたからです。

震災という大きな逆境にもかかわらず、ひたすら芝居を愛して下さるお客さん方の、切実な感情とジカにふれあった感激、それが強く身体にしみこんで、私はもっと幅の広いお客さんと芝居を創っていきたくて願う気持でいっぱいになったからです。・・・

そのころ島村先生の遺族の方から「八重子さんも成長したのだし、劇団をつくるなら芸術座を名乗っては」というおすすりめもあつたので、義兄は汐見洋さん、友田恭助さん、田村秋子さんに応援を求めて、芸術座を再興することになりました。

もちろん中村吉蔵先生、楠山正雄先生をはじめ、義兄の知己の方々は、まだ二十そこそこのこの私を看板にしては荷が重いと忠告や反対をされ、小山内薫先生、土方与志先生先生の築地小劇場建設も軌道にのり、いずれは私も参加するものとみられていただけに、もっと先にした方がいいのではないかという声もあつたようです。しかし、義兄の決意は堅く、ついに翌十三年二月牛込会館で旗揚げをいたしました。

その時のだしものは、有島先生の『ドモ又の死』、イブセンの『人形の家』、小寺融吉先生の『真間の手古奈』で、出演者は汐見さん、友田さん、田村さんのほかに室町歌江、松井きよみさんが参加して下さいました。私は『ドモ又の死』で友田さんの画家の恋人、『人形の家』のノラ、『真間の手古奈』で手古奈をやりましたが、いずれも好評でうれしいスタートをきりました。・・・

第二回目の公演は四月に再び牛込会館であげました。だしものはアンドレーフの『なぐられる彼奴』。第三回がシヨオの『武器と人』、長谷川如是閑先生の『喰違い』の二本で、出演者は前回と同じメンバーでした。・・・

しかし、この公演を最後に、青山先生、友田さん、田村さん、汐見さん、東屋さんは築地の創立に参加し

てしまわれ、私は独りぼっちになって、随分と淋しい思いをいたしました。①

再興芸術座による復興公演で組まれた戯曲『真間の手児奈』は、万葉集にも詠われた故事に基づく。「葛飾の真間の入江にうち靡く 玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ（山辺宿禰赤人）」この作品は舞踊研究家小寺融吉により執筆され、大地震の一年前帝国劇場において初演された。復興公演では水谷八重子を主役として友田恭助や田村秋子が共演、作曲は中山晋平、振付は藤間静枝が担当する。

小寺融吉作『真間の手古奈』全一幕

処 下総の郡、真間の入り江 時 上代

平舞台、中央よきところに井戸あり。井戸の上手に続き、平たき石あり。

上手前の方に大なる切り株あり。井戸の上手、後に大なる柳あり。柳のかたわらより、ゆるく傾斜したる路ありて、上手に通ず。

行麿 そちが手古奈か。

手古奈 （うなずく）

① 水谷八重子著『水谷八重子―女優一代』四一―四五頁。

行麿 今度、官に任ぜられて、みちのくへ下る行麿じゃ。

家来 （行麿に） モシ

行麿 うなずく。家来手古奈に近より、包みを与えんとす。

行麿 ほんの土産物じゃ。志じゃ。

手古奈 包みをうけとらず、会釈して後にさがる。家来思い入れありて、包みをひらきはじめる。

行麿 手古奈、そちの美しさは、東路を行き来する旗びとの口々に、歌のように歌われて居る。はてはおちこちの里人が、見ぬそちの姿にあくがれ、そちの住むこの真間の入江に限りない思いをよせて居る。行麿も聞き伝えて、道をまげて尋ねてきた。さ、志の品を手にとりて見い。・・・手古奈、どうしたのじゃ、ためらわず、手に取って見い。それはみな、そちの物じゃ。行麿が心づくしのはなむけじゃ。そこで、今からともに任地の、みちのくへ下ってはくれんか。年が経ち、期がみちたらば、都に伴うてやる。かりそめながら国の司じゃ。誓いの言葉は無にせんものを。

家来 どうだ、うれしいお言葉ではないか。なんと、おぬしは仕合わせ者だ。

手古奈 見も知らぬかたがたが、いつもそうおっしゃって下さいます。ご親切すぎてもったいない。わたくしとすることが、どうしてそのような仕合せが望まれましよう。皆様がおっしゃいます。「その汐風にさらされた、肌ものを脱ぎ捨てぬか。」けれども海士の仕事も馴れては楽しいございませぬ。また、「ここを出て、旅立たぬか。」ともおっしゃいます。けれど、ここに生れて明かし暮らした真間の入江、ほかに参る心も起りませぬ。

家来

(包みの品を見せ) まあまあ、この品をよく見るがいい。

手古奈

いいえ、見たうございませぬ。・・・

五人の男たちはこの間に水がめの水しずかに汲み終わり、手古奈と家来のうしろに集りて、家来の包みをジロジロ眺め、初めは冷然とし、やがて不安げに、後には殺気だちてありしが、ここの手古奈の言葉にて、俄に狂気の如く、ほとんど同時に叫び罵る。

安是彦

よく云った。

くず人

やっぱり手古奈だ。

赤丸

いつまでも真間を出て行くなよ。

鈴虫

思ったとおりだ。

鹿丸

おれたちの手古奈だ。・・・

手古奈と五人の男たち、いずれも手を取り合いて、声なし音楽始まる。前奏、歌あり。歌三節観相あり、手古奈みずから第一節を歌い、第二、第三節は陰にて歌わせて舞う。安是彦立ちて、途中より共に舞うもよし。柳の枝を折りて舞うこと、歌に曰く。

常世の春よ

真間は ふるさとの海のおと

そよ吹く風にも すみなれし

入江も ゆかしき 花の雲

世わたるみちも

春を みなそこに玉藻かる

かつしか乙女の しおじみし

おもいも さびしき 海士小舟

常世の春よ

あわれ いにしえをさながらに

つたなき ころも 人の身も

わすれて したわむ たたえなむ

①

小寺融吉作『真間の手古奈』配役

大正十一年七月 帝劇女優劇 於帝国劇場

安是彦Ⅱ守田勘弥 赤丸Ⅱ板東寿三郎 手古奈Ⅱ森律子 くづ人Ⅱ板東三吉 鹿丸Ⅱ板東嘉好

館石Ⅱ板東弥好 監督Ⅱ仲本貞一 装置Ⅱ田中良

大正十三年二月 再興芸術座 於神楽坂牛込会館 同年六月 於渋谷聚楽座

安是彦Ⅱ友田恭助　くず人Ⅱ根本淳　鈴石Ⅱ三木茂二　赤丸Ⅱ河原侃二　鹿丸Ⅱ小松孔明
行麿Ⅱ浅野慎二郎　臣Ⅱ幹茂二　供Ⅱ江原佐乃　同Ⅱ伊藤隆世　信太彦Ⅱ正野美夫
手古奈Ⅱ水谷八重子　波麻児Ⅱ室町歌江　谷地児Ⅱ田村秋子　依羅児Ⅱ関井春子
監督Ⅱ小寺融吉　舞台意匠Ⅱ田中良　作曲演奏Ⅱ中山晋平　舞踊振付Ⅱ藤間静枝　①

被災による経営悪化のため十三名に削減された帝劇女優陣も、大正十三年二月麻布南座を借りた復興公演に参加する。十四日間昼の部で松居松葉作『秀吉と淀君』に、夜の部も益田太郎冠者作『クレプトメーニア』に出演した森律子は、帝劇改修後の翌年二月同じく太郎冠者の喜劇『月給取』で低能娘を演じ、陰鬱な罹災地に微かな笑いを甦らせた。俳優としての貴重な苦心談が、彼女の回想には含まれる。

復興公演への訓練―盗癖御用心・白痴観察行（森律子『女優生活二十年』）

大震災直後、私共の本城である帝劇の改築されます間、麻布の南座へ出演いたしたことが御座います。その折の狂言中、『クレプトメーニア』という喜劇がありました。その中で私の役は、クレプトメーニア、即ち盗癖を持った富豪の夫人と触れ込んで、実は亭主と共謀して医師の処で、わざとその発作状態を装いながら、病的に物を盗んで見せる場面がありました。勿論かような方面に、幸い天分も経験もない私は、そ

① 田中栄三著『明治大正新劇史資料』一六二―一六三、二〇四―二〇六頁。

の態度、手付き、目つきなどに就いて教授を受ける訳にも参らず、減多な処で練習でもいたそうものなら、当分世間に御無沙汰をいたさねばならない身となりますので、已むを得ず、自宅で自分の物を盗む恐ろしい練習を始めました。・・・

さていよいよ舞台上に掛けました処、相当に御好評を頂きましたので、少々変な気分がいたしました。その後御見物くださいました方々のお宅へ伺いますと、お座敷へお通し下さるやいなや、お気軽な奥様などは真面目な顔でお女中に「なにか失くなりはしないかえ、森さんが見えたから、お座蒲団の勘定をよくして置くのですよ」などと仰有いますので、正直なお女中は私の顔をギョロリと見られるには閉口いたしました。

盗賊、殺人、乞食、狂人などの様な極端な役になりますと、観客のお眼には確かに役者が芝居をして居ることがはっきりと映りますが、なまじ普通の人間を演じます時は、不思議な程役と俳優個人との性格を混同されますので、ある役柄によつては、大層物知りのように感服されましたり、まあある時は「あんな男を慕って死ぬなぞということがありますか」と現在生きて居る私に、お小言を仰有る方があります様に、作も台詞もほとんど忘れられて、ただ俳優そのひとに対する感情だけ強まることは、自己擁護の上に、決して一笑に付せられない点であろうと存じます。・・・

俳優はその与えられた役に対して、ただ最善を尽すのみを知って、他に決して不服を唱えざる事と、平素自身を戒めて居りましたが、大正十四年二月帝劇上演の狂言中、私の演じます役は社会劇『月給取』に現れるお仲と呼ぶ、二十歳に成ってまだ涎を垂らして居るという低能娘。しかもそれが一興行中、自分にとって後にも先にも唯一無二の役と承った時は、いささか茫然とたらざるを得なかったので御座います。

平素聞く処に依りますと、配役は俳優の柄、持味等を嚴重に考慮して決定するそうでありますが、この低

能娘の書き抜きを与えられました私は、ただ感慨無量とでも申しましょうか、衆目の見る処その柄といい、持味といい、さては自分がその最適任者なのかと思えば、今更ながら悲観を越えて呆れ果てました。・・・しかし物事もかように極端に達しますと、相当に勇氣の出るものと見えまして、いやしくも上は女王より下は乞食に至るまで、場合により時に応じて演ずるのが使命であります以上は、涎垂らしの低能娘もまた一興、ひとつ最善を尽して見ようと、吾ながら天晴れな決心を以て、いよいよこのお馬鹿ちゃんの研究に取り掛かりました。

ところがここに図らずも一大哲理を発見いたしました、人知れず驚入りましたのは、利口らしい真似は大抵な馬鹿にも出来ますが、馬鹿らしい真似はよほど利口でないと出来ぬという点で御座いました。・・・

まず第一に注意を受けました点は、物の言い方、身体の動き方などに於いて、低能、狂人、中風、酔っ払い、老人の五種類は、よほど似通った親類で、舞台上の演出法としてもほんの僅かな相違で、それぞれ区別されるという事で御座いました。例えば首を一步に曲げ、片腕を胸の辺りまで上げて、手先だけ力なく垂らし、少し上目を使って眼の光を鈍らせ、口を開け放して踵を地に着けず、前屈みに歩けば自然に白痴と成るものが、もしこの動作に一寸でも左右によるめく足取りが混じると、直ちに酔っ払いになってしまいます。・・・いよいよ練習に取り掛ってみますと、この五種類がたちまちひとつに成って、酔っ払いの様な、年寄りの様な、中風の様な、狂人のような、自分でも区別のつかない、妙なものが出来あがるので御座います。所謂なかなか馬鹿にならない至難の芸であることを悟りました。

そこで先年巢鴨脳病院見学の事を思い浮べまして、この度は王子脳病院へと車を走らせました。そして親しく院長小峯博士から、低能患者に就いてのお話を承り、同時に実物の顔、形、動作、発音その他の病症を実見させて頂きました。小峯博士のお話しに依りますと、極端な狂人と白痴とは、その区別もおのずから明らかで御座いまいしょうが、普通両者の症状はある点までよほど似通って居ります為に、その区別はすこぶる微妙なものらしいございます。白痴の症状には痴呆性と興奮性の二種類があって、痴呆性は無味、疲労状態を現し、興奮性はそれに比して、やや速かな注意力、爽快、不安、悲哀、軽き怒り、笑い、または模倣癖を備えて居ると承ります。・・・

動作、発音にも種々実見いたした処を取り入れて、いよいよ御見物の前に立つたので御座います。もともと芸道未熟の私が、しかも低能娘は初役の事で御座いますから、一体どんなことになりますやら、一向見当がつかせぬので、随分心配いたしました。初めて揚げ幕から花道へ出ました時、第一に私が感激いたしましたのは、いっぴくなく御婦人の御見物から、予想外の拍手を頂きました事で、これは平素の実験上まことに得難い賜物といまなお深く感銘しております。

次に私が甚だ光栄に感じましたのは、専門的知識をお授け下さった小峯博士のほか、帝大の三宅博士、慶応の野村博士など斯道の大家の方々が多数御見物下さって、「これは確かに本物だ。身体を前後に揺さぶる具合は明らかに嗜眠性脳炎の結果で、言語の様子から言えば、メルタルエージ（知能発達の止った年齢）は十二歳ぐらいであろう。あれは立派に興奮性モンゴリヤ型だ。私の病院へ来れば、早速入院させる代物だ」と非常にお褒めに預かった事であります。①

大正十二年浅草公園劇場でトルストイ作「復活」等を提供し、翌月軽井沢における映画撮影中、大地震に見舞われた舞台協会は、震災復興の舞台を同年の暮から帝国ホテル演芸場で披露し、以後翌々年まで牛込会館、神田新声座、本郷座等で七次にわたり公演した。これらすべて参加した岡田嘉子は、まもなく日活京都撮影所に移り、山田隆弥と夏川静江も東亜キネマの専属となる。①

復興公演から映画界入りへ（岡田嘉子著『悔いなき命を』）

映画、舞台とせっかくめどのつしかけた舞台協会も、また出発点へあと戻りです。取りあえず生活の道を立てなければ、というので、高島夫人が奔走し、有楽町のガード下にカフェを開いて、〈カフェ・ステージ〉と名づけ、協会の女優総出ーといっても四、五人でしたがーで、焼け残りの品を集めての店飾りから、ウェイトレスの役までつとめました。

それでも舞台への意欲は失わず、早くもその年の十二月には、あの大震災を無事に持ちこえた、ライト設計の帝国ホテル演芸場で、山本有三作品『生命の冠』（私の役は白痴の娘）や、武者小路実篤作『野島先生の家』を、翌十三年の二月には牛込会館で武者小路氏の『その妹』、三月には神田の新声館で谷崎潤一郎作『お艶殺し』をやっています。・・・この時のことで忘れられないのは、小屋が震災後のバラック作りだっ

① 田中栄三著『明治大正新劇史資料』一三四―一三五頁。

たので、雨が降るとトタン屋根に当たってパラパラ音を立て、台詞も何も聞こえなくて困ったことです。この年にはなお、トルストイの『闇の力』やゴールズワージーの『勝利者と敗北者』などもやっています。

しかし、舞台協会の経営はだんだん行き詰まってきました。〈カフェ・ステージ〉も所詮は素人の商売、しかも舞台が忙しくなれば、私たちもそうそう店でお客の相手はしてられません。肝心の舞台の方も借金やりくりで、さすがの高屋夫人も音をあげはじめました。相当のまとまった金が入らなければ、どうにもならないところまで追いつめられたのです。このとき日活から私に誘いの手がかかりました。そのころ日活は現代劇を京都に移して大いに発展しようとしていたところなので、前金は望みどおり出すという話なのです。・・・

日活撮影所はそのころ、北野から嵐山へ向かう入口の大將軍というところにありました。私はその先の、御室の仁和寺も向かい側、兼好法師が『徒然草』を書いたという丘を前にした二階家を借りて、付人と二人で住んでいました。・・・日活撮影所へ私が入社したときには、松竹から梅村蓉子さん、帝劇から原光子さんが加わり、同時に三人の入社パーティを、東京の帝国ホテルで開くなど、いままで〈目玉の松ちゃん〉こと尾上松之助で売っていた京都の撮影所に新風を吹き込もうとする意気込みを見せた、華やかなものでした。

第一回作品は現東宝の重役、森岩雄氏のシナリオを村田実氏が監督した『町の手品師』。好評のこの作品に続いたのが、大阪朝日新聞一万五千号記念懸賞映画劇の当選作、吉田百助作『大地は微笑む』・・・この二本の映画で私の映画界での位置も出来かけ、次から次へと約四年間の間に十九本の映画に主演しています。

大正七年因習的な家族制度へ訣別し、上山草人の近代劇協会へ志願した伊沢蘭奢は、四ヵ月後に『ヴェニスの人』で初舞台を踏み、以後有楽座で出演の経験を重ねるが、やがて上山の渡米によって近代劇協会は解散した。この間蘭奢は生活の資を得るため、総合雑誌『中外』の新聞記者を勤め、中外社の社主内藤民治の斡旋によって畑中夢坡主宰の新劇協会に移籍する。

配偶者と別れた伊沢蘭奢と病妻を支える内藤民治はやがて恋仲となり、大森の借家に愛の巣を営む。大地震の日被災を逃れて蘭奢は芝に無事転居したが、三ヵ月後身辺に予期せぬ事態が生じた。

かねて内藤は進展する政治情勢の渦中にあった。革命を成就したソビエト・ロシアの承認を彼は唱導し、国交回復のため東京市長後藤新平と使節アドルフ・ヨッフエとの会談を実現させる。震災後内務大臣に就任した後藤新平は、北洋漁業を正常化のためソビエト政府とのさらなる交渉を決断し、内藤にモスクワへの長期出向を要請した。相愛の男女を切り離す危機に陥りつつ、蘭奢は新劇協会の復興公演で主役を担い、さらなる自立への決意に向わせる。②

① 岡田嘉子著『悔いなき命を』七七―七八、八二―八三頁。

② 「内藤民治回想録」「論争」一九六二年十二月号、論争社。一八一―一八八。

〔参照〕夏樹静子著『女優X―伊沢蘭奢の生涯』文芸春秋社、一九九六年。

自立への決意と復興公演（伊沢蘭奢著『素裸な自画像』）

わたしたちは最初からお互いに自由な、解放された独立人としてお互いを拘束するようなことなく、二人の間に生れ出た一つの愛をもち育て、不完全なお互いの個性をつきあわせて、一つの完全な人格をつくり出そうという考えまで持っていました。・・・N（内藤民治）は青年時代に偉人後藤象二郎の同志であり、追隨者であった諸橋田龍という人の門に入って、漢籍、詩歌をを学んだとかで、文学に深い趣味があり、志士の気分を多量に持っていました。彼は二十歳の頃アメリカに渡って十年あまりの苦学をつづけ、あちらの大學を終えた後、ニューヨークの某新聞の全欧特派員として数ヵ年欧州各国を旅行していたくたいでしたから、酸いも辛いも嘗めつくした苦勞人でした。・・・

わたしたちの関係はどこまでも〈自由の心〉を基調としておりましたが、わたしにとってのNは、それよりもっともつと深い、複雑した心情の対象でありました。彼はわたしの愛人であると同時に兄であり、親であり、師でありました。Nは世間にまま見受けるように、圧制的に尊大な態度で臨むようなことはなく、あらゆる場合に自ら反省し、よく自己を解剖し、批判しました。反対にわたしがあり来たり女性の因習に囚われたり、粗笨な判断に流れるような場合には、必ずわたしの自覚を呼び起し、彼みずからをたしなめるのでした。・・・

それは暮れの二七、二八日の頃のことでした。身の毛のよだつような怖ろしい震災のどさくさも、いつとはなしに鎮まって来て、生き残ったわたし共もまずまず無事で年越しが出来ようと、不足勝ちな中にも（生

き延びた喜び」をお正月に期待していました。ところが突然「ロシアへ行く、それも明日早速出発する」とNが言い出しましたので、わたしはびっくりしてしまいました。・・・

Nは、国体の相違は兎に角国際政局の上からも観ても、日本の経済立国の上から考えても、シベリアの広い土地と富源を包蔵するロシアと提携しなければならぬと言う見解を持っておりまして、真に国を愛する政治家や、ロシアに理解あるお歴々たちと日露××協会を組織していました。そして、国民外交の舞台に上って盛んに活動しておりました。・・・

その晩わたし達は、丁度田舎から出て来ていたわたしの母と三人で、青山の〈いろは〉で簡単な晚餐をしたためながら、しばしの別れを惜んだり、留守中の相談をしたりしました。猪口をいくつか重ねたNは、ほんのり上気した目元に元気の好い光りを湛えながら、抱負を語ったり、国交回復に対する確信を述べたりして、不安がるわたしや母を慰め励ますのでした。

〈いろは〉を出たわたしは、冷え冷えする冷気に思わず顎を襟巻きに埋めました。露地を出ると、小さな片割れ月が皎々と青山墓地の森の上空に凍りついていました。わたしは思わず、「まだ無政府状態だ」ととりどり噂されるシベリアの長い鉄路や、雪に鎖されたモスコの空を連想したりしました。・・・

朝鮮人騒ぎや暴動の噂が納って、帝都再建の勇ましい合言葉がバラック造りの槌の響と調和して、市民の胸に安堵と希望を与えていたとは言え、・・・一人ぼっちで残されたわたしは謎の国、スフィックスの世界に吸い込まれていったNの後姿を、寂しさに誘いこまれるままに想い浮べては、生別が死別になるのではないかと妄想するのです。寂しいうちにもお正月のおもちを祝ったわたしは、新劇協会が一月十日から仙台座で『西の人気者』その他を上演することになりましたので、舞台稽古やなんかで寂しさを紛わすことができました。

きました。

壊滅の後を受けた帝都は、夜を日について建設を急いでおりました。閑暇の産物だと言われる芸術などはほとんど眼にもくれなかったのですが、心ある人々の中には芸術の建設的意義や、生活と不可分の本質を説き始めておりましたので、わたしなどもそれに共鳴して、こんな時こそ芸術本来の使命を発揮しなければならぬと、ひそかに心懸けたのです。それだけにまた励みが出て、Nが国家のため一命を捧げるならば、私もまた今度こそ芸術のために献身しようと思えました。・・・

Nの手紙にはモスコウでの情況が手に取るように描かれていました。「一週間前から要路の大官を歴訪して、それぞれ専門的に交渉を進めている。チチエリン外相と会見した最初の時は夜の十一時半であった。他の国が百年かかることを、一年で仕上げる意気込みだ。」・・・

Nが事業が第一だという心理こそ、男の本当の気持でしょう。いいえ、そうした大きな社会的の生活に較べれば、恋愛などはごくごく社会性の狭い、むしろエゴイズムの結晶にすぎないーとNの持説を肯定する気持と一緒に、劇団人としての自分の天職を持ちながら、恋愛中心に泥み勝ちな自分の薄志を自嘲する気持が起きてきました。自嘲はやがて自己叱咤となりました。そしてわたしは沢田正二郎さんなんぞが、初日が開く前には、一週間くらいは徹夜して稽古をなさる時もある、というようなことを想いだすのでした。

Nの帰国は長引くばかりでした。桜が散ってツツジの便りがチラホラ新聞に現れる四月下旬になって、またまた二、三ヶ月は延びるという通知が届きました時には、わたしはもう驚きませんでした。・・・傍らにもいない、またいつ帰って来るかもわからないNへの愛着から解放されて、自分の時間を自分の芸術のために完全に捧げよう。わたしは六年前、夫のもとから飛び出したときの〈生き生きした生活〉を再び喚び起し

ました。淋しさを忘れる気持からでなく、いよいよ真剣になって自分自身を掘り下げる生活へ猪突するようになりました。

灰燼の中から蘇った新劇協会は、更生の意気をもって一回毎に目覚ましく進出していました。それにプロレタリア劇壇が台頭しかけていた頃でしたから、そうして新興新劇運動の動きは、わたし達の立場を絶えず刺戟せずにはおりませんでした。五月になってから、新劇協会は帝国ホテルで第六回の公演をやりました。出し物はチェホフの『桜の園』でした。

ロシアの農民生活をテーマに取り入れた筋は、どんなにわたしの心を動かしたことでしょう。貧しい人々、虐げられた人々の生活を、自分の変転極まりなかった過去、ほかの女優さん達のように豊かなきらびやかな服装や持物などを対照して、毛糸の襟巻を無難作にひっかけている現在の自分と思ひ合せては、むしろ悲壮の快感を呼び起し、またかつては華やかな功名心にもみ煽られていたことを浅はかに想われてきました。①

新劇協会の震災復興公演（秋庭太郎著『日本新劇史』）

関東大震災があつて、東京の大半が焦土と化したのであるが、こうした騒々しい最中にも畑中は協会の公演を企て、この年の十二月二日より三日間、渋谷の九頭竜女学校の講堂を借りて、シング松村みね子訳の『西の人気者』三幕と、ストリンドベリイ小山内訳『犠牲』一幕を、畑中・伊沢・友田・生方・小杉義男等

① 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』一〇二―一〇五、一七四―一七七、一八五―一八六頁。

で所演、翌十三年正月には仙台方面へ巡演、帰京して二月の十六、十七の両日帝国ホテル演芸場に『西の人気者』と『犠牲』を再演、その五月二日から五日間同じく演芸場でチェホフの『桜の園』四幕を新劇協会五周年公演として上演した。舞台監督を畑中、装置を岡鑒一、照明を遠山静雄、舞台主任を隆松秋彦が担当。配役は伊沢のラネフスカヤ夫人、夏川静江の娘アアニヤ、三橋公のガイエフ、畑中のロバアヒン、小野宮吉のトロフィモフ、奥村博史のフィリス、小杉義男のヤアシャ、隆松秋彦の浮浪人等であった。

この『桜の園』に対し、岸田国士は『演劇新潮』（大正十三年六月）で、「皮肉でなく、お世辞でなく、僕は新劇劇団を非常に面白く観た。上演者はたしかにモスコオ芸術座の『桜の園』が、どんなものであるかも知っている。少なくともある程度まで研究していると僕は思った。この態度は誠に頼もしい態度である。」云々と評しているが、良心的な演出であったことが知られる。

次いで協会は十月二三日より三日間、帝国ホテル演芸場で久米正雄の『帰去来』四幕、岸田国士の『チロルの秋』一幕、正宗白鳥の『人生の幸福』三幕上演した。第一の配役は浦上信一の三瓶覚右衛門、一色久子の覚右衛門の妻まさ、畑中の長男覚江、御橋の伊藤徳次郎、高橋豊子の佐久間よね、伊沢の佐久間の娘きよ、楠田清の相良賢造、第二は石川浩のアマノ、伊沢のステラ、松井きよみのエリザ、第三は畑中の安城豊次郎、御橋の豊次郎の弟喜多雄、高橋豊子の異母妹かよ子、隆松秋彦の別荘番藤七であった。①

① 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、三四六―三四七頁。

大地震の三ヵ月後坪内逍遙は朝日新聞社の要望をうけて、関西地方への巡演を敢行し、五日間にわたり児童劇を上演した。すなわち、十二月一、二日大阪中央公会堂、三日京都岡崎公会堂、四日、五日神戸基督教青年会館において『メレー婆さんとその飼犬ボチ』、『因幡うさぎ』など五作品が組まれ、これらには帝国劇場技芸学校の卒業生多数と少年少女数名が参加する。坪内はみずから巡演での訓練・指導にあたり、各地で児童劇の意義に関する講演も行った。ついで翌大正十三年震災下の東京へ戻り、四月二六、二七、二八日早稲田の大隈会館庭園において『神楽坂の息子銀吉』等が上演され、ここでは河竹繁俊も協力した。

この時期における坪内は劇壇の低俗化と営利主義を慨嘆し、次世代への期待として児童劇の振興を推進しつつあった。つとに大正十一年十一月二六、二六日有楽座において『メレー婆さんとその飼犬ボチ』はじめ七作品が上演され、帝国劇場などをも会場として大地震勃発までに八回の公演を重ねていた。① 演劇復興をめぐる坪内逍遙の所論は異色の内容と云うべく、震災時の低俗化を戒めるとともに、児童劇振興の必要を訴えている。

坪内逍遙「復興期芸術に関する予測」(『逍遙全集』第九卷)

大震災以前の標語は、どの方面に於ても改造の二字であった。在来の制度、文物、習慣の大概を背時代的として根本的に改めようという希望が一般であった。が、これから少なくとも五、六年はあらゆる事業に復興という合いことばが使用されるだろう。……今度の天災は惨烈ではあったが、改造の理想を妨げていたあ

① 大村弘毅「児童劇公演顛末」(『逍遙全集』第九卷、七一二三頁)。

る種のを除くためには、すこぶる有利であったといえる。またそれが天然力であっただけに、一般には余弊が少ないであろう。物質的にも精神的にも文化の中心であった東京が全くのタビュラ・ラサとなつてしまったが、幸いに物資が豊富に供せられ、官民の元気が旺盛であり、経綸が足り、才能が働きさえすれば復興はさまで困難じゃあるまい。……

倉廩^{くら}実ちて礼節を知り、衣食足つて榮辱を思う民衆心理から推測すると、実利本位、現用第一が大きく高く呼号される間は、文学も芸術も当分はその本領から遠ざかつて、主として厚生利用の手伝い役をせねばなるまい。……作今催される演芸には罹災者慰安を標榜しないものは一つもない。新旧の専門俳優のそれも、所謂新劇団のそれも、また正當にアマチュアと呼び得られる向きのそれも、女学生や小学児童のそれも、あるいは音楽家、寄席技芸家のそれもみな一斉に寄付であり、義捐であり、無料である所から、たといそれが粗笨であろうと、生硬であろうと、幼稚であろうと、拙劣であろうと、感謝を以て迎えられるべきもので、批判され是非せられるべきものではない。これを鑑賞する大多数者は、漸く衣食住の危急や不安から救済されて、便安や慰藉に飢えている人々である。飢者の食を選ばないのと同じ程度に彼等は慰安芸術に対してはその巧拙を問ういとまはない。しかもこういう観衆の喝采が存外技芸家の心境に面白くない影響を与えて、彼等の芸を荒ましめるおそれがある。ちようど長い間地方廻りばかりをした名優の芸が下降するようなものである。……バラック廻りの芸術だからとて、それがバラック式であったり、スイトンや巴焼式であったりしてはならぬのに、もうその兆しが見えかけるのは嘆かわしい。慰安ということも必要ではあるが、私はそれがために未来の国劇術の大切な種子まで蕩尽してしまいたくない。……

既成の人間に絶望した以上、未来の人種に望みを属するのは自然だ。人間の性質が根本的に改まらないう

ちは、どんなイズムが実現されようと、どんな大改革が制度、風俗の上で行われようと、つまり暴を以て暴にかえるか、血で血を洗うような結果に終って、差し引き益するところが鮮少なからである。だから何事も未来の人間の造就を基礎としてかからねば駄目だ。児童教育が重要視される所以である。・・・

恐らくわが国劇の未来の要素として、唯一の頼みとなるものは家庭から出発する児童の劇芸術ばかりではあるまいか？ それがわが未来の劇の最も清新な種子となるのではあるまいか。私が家庭に於ける児童劇を主唱したのは、一面教育的目的のためであったが、一面は芸術のためでもあった。けれども何物も、殊に容易に実行し得らるるたぐいの物は実用のため、或いは慰安のために配給式に提供される昨今であってみると、私の主唱した児童劇とても、まだ芽をだしたばかりであるにも拘わらず、すぐに摘みとられて公設市場へ持ち出され、主唱者の期待を裏切るどんな献立用にも使用され、どんな料理をされるか解らない。もしこの児童劇すらのスポイルされるようだと、梨園の新収穫は非常に遠い未来までまたねばならぬようになるだろう。既に家庭用と名のつて出たくらいだ。私の所謂児童劇は本来は公園すべきものでない。けれども実際に標本を示さない以上、在来のお伽劇や児童劇と混同されたりして、かえってその本旨を誤解されるおそれがある。今度私が、帝劇の第七期女優をひきいて関西へ家庭児童劇の巡演に出掛けるのは、これがために外ならない。

私の所謂児童劇が未来の劇に一の要素を提供するものたることに関する私の主張は、とても簡短には説き尽されないから、一言その要をいえば、それは国民の劇に関する趣味性及び鑑賞力を涵養するものであり、その想像力を啓発するものであり、同時に未来の舞台装置法や芸風の上にも初紀元を画すべき可能性を蔵す

るものであるということである。①

中村屋相馬黒光をパトロンとし、秋田雨雀に統率される先駆座は、麴町の土蔵劇場が破壊されたため、第二回を大正十三年四月、早稲田大学のスコットホールで行った。演目として秋田雨雀作『水車小屋』とアナトオル・フランス作『運まかせ』、それにストリンドベルヒ作『仲間同士』が演じられる。『秋田雨雀日記』によれば花柳はるみや柳瀬正夢も公演に参加し、一部被災した中村屋から稽古の場を提供された。

震災後における先駆座の復活（『秋田雨雀日記』大正十三年抜粋）

一月九日 午後一時から浅草の沢田（正二郎）の招待でアメリカ屋に集まった。山本（有三）、鈴木（善）、藤井、仲本、清見、額田、能島、菊池（寛）、小寺、北尾、金子（洋文）の諸君が来た。四時から『日蓮』と『震災余聞』と『忠次』を見た。沢田の書いた『日蓮』は面白くないものだ。言葉を妙に古風にしたもの面白くない。菊池君のは通俗哲学しかないつまらないものだ。『忠次』は馬鹿げていても面白い。

二月十一日 晴。温かい。半日床の中にいた。寝ていると武藤さんが来たので、二人で（第二）芸術座の『ノラ』を見た。（水谷）八重ちゃんのノラはなんといっても若すぎる。『ドモ又』は新派のよりはいいが、

① 坪内逍遙「復興期芸術に関する予測」（『逍遙全集』第九巻、八六一―八六二、八六八―八六九、八七〇―八七二頁）。

綺麗すぎて貧乏アチリエの感が乏しい。

二月十二日 夜スコットホールで未来社の試演を見た。『内部』は思ったより成功していた。芸術座の時から面白かった。舞台装置もあのとき寄り数等いい。芸術座の時は全く実在感がなかった。

二月十七日 十一時に青山斎場の平沢君の告別式へ行く。代表員達の悲壮極まる弔辞、むせかえるような香の煙、人いきれ、一憤激の中から生まれてくるセンチメンタリズムー組合旗の剣先の物凄さー弔歌がどこからともなく、地獄の底の方からとつとつと沸き上がってきた。

三月十五日 〈新演芸〉から頼まれて、浅草の観音劇場へ守田勘弥を見に行く。

三月二三日 小雨のち晴。午後一時から神楽坂倶楽部で先駆座の顔合わせをした。花柳（はるみ）、運天姉妹、室町歌江、金子の女連も集った。俳優は大体揃いそう。稽古の時間が短いので、余程みっしりやらなければならない。顔合わせの後、川添、佐藤、小林の三君と共にスコットホールの舞台を見に行った。あのホールは実にいい感じだ。あのホールを時々借りてなにか継続的にやりたいものだ。

三月二八日 佐藤君と二人でスコットホールに金森主任を訪い、四月二四、二五、二六の三日間借りる約束をした。二四日の昼はアナトオル・フランス八十年生誕祭をする。

四月一日 夜、芸術座を見る。ショウの『ブルンチール大尉の世界観』ー如是閑の『高等曾我延家』

四月二日 スコットホールに先駆座の稽古にいった。『演劇新潮』に『骸骨の舞跳』が出た。

四月三日 スコットホールの先駆座の稽古に行く。関井という女優さんが新たにきた。『演劇新潮』は発売禁止された。『骸骨の舞跳』のためではないかと思った。

四月四日 スコットホールの稽古に行った。ストリンドベルヒを呼んだ。明日から花柳君が出るはず。ス

トリンドベルヒのベルタをやることに決定した。

四月五日 スコットホールへ行く。今日は花柳君と運天さんの妹さんも出てきたので、女優が全部揃った。

ストリンドベルヒと『水車小屋』を稽古した。

四月七日 スコットホールの稽古。中村屋から稽古の室を貸すという返事がきた。

四月九日 今日から新宿の中村屋で先駆座の稽古をした。中村屋の主人がきて親切に話してくれた。ストリンドベルヒとアナトオル・フランスと『水車小屋』をやった。このふうでいくと、きっと物になりそう。

四月二一日 先駆座稽古。今日はじめて芝居に自信が出来た。『水車小屋』にはなお工夫の余地がある。

花柳君の科白のとき、ポーズを置くこと、笑いを長くつづけることに注意。赤子の泣声、小鳥工夫。宣伝がかなり広くゆき渡っていいようだ。

四月二四日 暑い。スコットホールへ行き、道具の制作に手伝った。夜中村屋の〈夢を語る人々の会〉でストリンドベルヒの第三幕目と『水車小屋』をやった。みんな喜んでくれた。

四月二五日 風、雨。不安な一日。芝居で頭がいっぱいだ。警視庁検閲済みになった。神経を疲労しつづけた一日。スコットホールで半日働いた。『水車小屋』の道具が面白くない。柳瀬（正夢）君がこないのみんな困った。東洋大学の学生が背景をつくってくれたが、面白くないので悲観した。『運まかせ』と『水車小屋』だけを舞台稽古にした。明日『水車小屋』の道具を変更すること。

四月二六日 よく晴れた。昨日の風雨を心配したがよく晴れた。芝居のことが気になるので、十一時ごろスコットホールへ行く。柳瀬君のデザインを土台にして『水車小屋』の舞台を作った。構成派ふうの舞台にした。今度はよきそうだ。ストリンドベルヒの舞台もよくできたので安心した。夜、驚くべき感激。アナ

トオル・フランスもよかった。『水車小屋』もよくなった。言葉に非常な力が生まれてきた。ストリンドベルヒの花柳君のベルタは実に立派だ。今夜はじつに愉快な力強さを感じた。

四月二十七日 晴。今朝はかなりよく眠れた。連日の稽古で身体が疲れていたのに、この二日間で頭がめちゃくちゃにさせられた。『運まかせ』はあれよりよくはなりそうにないが、ストリンドベルヒは稽古をすればするほどよくなりそう。ストリンドベルヒのレアリズムを研究してみよう。二日目を五時半に開けた。見物は昨日と同じ位だ。友人や新聞社の人達が多く来てくれた。『水車小屋』は今日は一番いい出来だ。電気も申分ない。柳瀬君のデザインはいい。言葉もますます自然になった。ストリンドベルヒはもつともつとよくなる。

四月二十八日 晴。スコットホールへ行き、あと片づけをした。戦場のあのような乱雑さがある。芝居に關係して以来、今度のような喜びを感じたことはない。佐藤、川添、佐々木、小林の他、東洋大学の諸君も手伝ってくれた。夜六時からカフェ・プランタンで先駆座慰労会を開いた。同人のほか、花柳、室町、関井、松井の女優連もきた。全員二十名、愉快的無邪気な一夜を過ごした。ストリンドベルヒの日本に於ける最初の成功と確信していい。①

秋田雨雀の自伝に含まれる貴重な一文は、震災復興へ向かう諸劇団の決意を伝え、当時の状況を簡明に示す。

① 『秋田雨雀日記』第一巻、三三七―三四七頁。

震災からの復興と演劇の再建 (『雨雀自伝』)

関東大震災は大きな傷あとを日本の社会に残したまま、一步步記憶の世界へ過ぎ去っていった。しかし、いつでも耳を澄ますと、どこかで人々の泣き叫ぶような声がしていた。人々はちょっとした物音にも強い衝動を感じた。一旦京阪やその他の地方へ逃げのびた人々も、そろそろ東京へ帰って来た。復興！復興！という声は機械的に響いている。内包した矛盾をそのままにして、日本の社会は復興事業に急いでいる。ローマの廃墟のような東京の焼土の上に、バラック建が一通り立ち並んでいる。すいとかんや安てんぶら屋の店がバラック建のカフェに早変わりしたり、そばやの店が半分土間になって、円テーブルに椅子が並べられたり、子供洋服の店や石油コンロの屋台店が毎日のように殖えていったりした。そして動物の焼けただれのような臭気、砂ほこりといったしょになって植民地のようなバラック建の上を吹き捲くっていた。その中を人々は血走ったような眼をして、そのくせどこか浮わついたような足どりでぞろぞろ歩いていた。これが大震災の翌年の春ころの東京だった。...

大きな社会激動の直後に来る芸術が、詩および演劇であることは、ロシア革命の場合によっても証拠立てられているが、震災直後に起った芸術は、日本では演劇の復興であった。沢田正二郎は震災前から浅草で芝居をしていたが、この年の一月にはバラック建の劇場で『国定忠治』『日蓮上人』および『震災余聞』の三つの作物を上演していた。沢田は前にも記したように、表現力の強い俳優であったが、生活態度の英雄主義的傾向から、次第にファシヨ的になっていった。この傾向のテンポを早めていったのはやはり大震災から

よる自然的・社会的脅威であった。このころの沢田正二郎は、すっかり国定忠次になりすましていた。

私はこのころ佐々木孝丸、佐藤青夜、川添利基などと先駆座の仕事をつづけていた。この座は最初小ブルジョアの演劇研究者の集団であったが、土蔵劇場の試演後大震災に逢い、この年スコットホールにアナトール・フランスの『運まかせ』、ストリンデルベルヒの『仲間同士』および私の『水車小屋』をやった。舞台装置は柳瀬正夢であった。この演劇研究のグループは、劇場商業主義に対する反対を標榜し、エレオノーラ・ジョーゼの言葉を引用して All or Nothing（凡てか無か）のスローガンを掲げていた。しかし、このスローガンのかげに既に二つの対立した力が動いていた。一つは社会的なものであり、他は芸術至上主義的なものであった。前者は後ではトランク劇場、前衛座等のプロレタリア演劇の創立の一要素となった。

小山内薫はこの年、築地小劇場の旗揚げとともに華々しい活動を開始した。この劇場は、若き演出家であり、出費者である土方与志との芸術的協力によって創立されたもので、その第一回の公演はゲーリングの『海戦』によってはじめられた。これは文字通りの『海戦』であった。小山内は自由劇場の失敗いらい長く休火的芸術生活をつづけていたばかりでなく、この演劇行動によって再びその存在を認められ、またその敵である程度まで屈服せしめたという感じがした。小山内と当時の論敵との対立は、小山内の芸術至上主義と小ブルジョアの通俗主義との対立であったと私は理解している。

①

① 秋田雨雀著『雨雀自伝』一〇五―一〇六、一〇八―一一〇頁。